

津波から尊い命守り抜く

未曾有の被害をもたらした2011年3月11日の東日本大震災。津波の脅威は発生から3年以上が経過しても多くの人の脳裏に鮮明に焼き付いている。今後は南海トラフをはじめとする巨大地震の発生が指摘され、自然災害に対する懸念は増すばかりだ。「二度と津波犠牲者を出したくない」。そうした思いから生まれたのが、日本救命具（本社：東京都中央区、中央研究所：春日部市）だ。独自の津波実験装置を有し、津波救命装備のオリジナル製品を開発・販売している。

（三宅芳樹）

■津波実験装置で耐久性確認
同社は住宅の建築設計を手掛ける高橋監理（春日部市）の100%子会社。社会貢献の意味合いもあり、2012年7月に設立された。大震災から1年以上経っても津波から身を守るような製品が世に出ていなかったことが、背景にあったという。

高橋監理技術部の鈴木信行次長は「防災関連商品は、あるに越したことはないが必需品ではない。どんなに品質が良くても売れるとは限らず、企業にとって手を出しづらい分野。誰もやらないなら、自分たちがやるしかない。そう考えた」と設立の経緯を振り返る。高橋監理の本社敷地内に中央研究所を設け、独自に製作した津波実験装置を設置。実験装置は長さ20メートル、幅2.5メートル（可変式）の水路に500リットルの水を流し込むこと

で、最大2.5メートルの津波を再現できる。試作品の耐久性を実験装置で繰り返し確認し、津波に耐えられる画期的な製品の数々を生み出している。

■京都大学と共同研究

救命製品は、京都大学の防災研究所と共同で研究開発しているため、性能の高さは折り紙付き。アイデアを駆使し、従来にない工夫が施されている。

「津波避難タワー 浮上式シェルター」（30～50人乗り）は、高さ2.2メートル、3メートルの鉄骨タワーの上部に浮上式のシェルターをセットした避難タワー。津波の高さがタワーを上回ると、シェルターが浮き上がる構造になっている。通常の避難タワーは想定される津波よりも高く設計されているため、20メートルを超えるケースもある。高齢者や障害者には上るのが困難な

上、津波がタワーの高さを上回ればひとたまりもない。同社の製品はこうした問題に対応した。

「携帯式 津波救命具」は、折りたたみ傘程度の大きさで携帯に便利な救命具。非常時には自分の息で膨らませ、頭部を浮上させる。透明なカバーで目、鼻、耳を泥水から確実に保護。LED灯付き非常備で、自分の場所をいち早く知らせることができる。

「津波救命力プセルボート」（4～6人乗り）は、鉄製の避難用カプセルボート。浮力体として発砲スチロールを使用し、内部浸水しても浮上を維持できる。電動式スクリュー付きで、救助を待たずに自走で着岸も可能だ。

■津波犠牲者を出さない

2014年3月から本格的に製品の販売を開始。5月は名古屋で開催された「第2回中部ライフガードTEC2014」防災・防災・危機管理展、6月には大阪市で行われた「第1回震災対策技術展大阪」に出展し、大きな注目を集めた。沿岸部の企業や保育園などから、問い合わせも増えているという。

芦田ケイ子社長は「東日本大震災の衝撃は、何年経っても消えることはない。今でもつらい思いをされている方々は大勢いる。私たちは、なんとか津波犠牲者を出さなくする方法はないか？」と考えてきた。少しでも皆さまのお役に立てれば幸い」と語る。

津波から尊い命を守り抜く。この強い思いは、どんな巨大地震が起きても揺らぐことはない。

日本救命具 中央研究所（春日部市）



タワーより高い津波が来るとシェルターが浮上する「津波避難タワー 浮上式シェルター」

画期的な救命装備を開発



泥水から目、鼻、耳を保護する「携帯式 津波救命具」

会社概要

【社名】日本救命具株式会社 中央研究所：春日部市豊
会社（株式会社高橋監理 野町2-32-1 ☎04 開発・販売
の100%子会社） 8・737・7373
【所在地】本社：東京都 【代表者】代表取締役社
中央区銀座8-15-8 長 芦田ケイ子（高橋監 【設立】2012年7月
（高橋監理銀座ビル）／ 理副社長） 2日

サイステックの実装状況

ネルギーを交換・散逸させること

建物に壊れにくく、また家具などの転倒が抑制されます。

長期間地震動に耐える地震動

遠い